

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：34504

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2022

課題番号：22K20011

研究課題名（和文）日本語受身文の誤用メカニズムの究明ー中国語母語話者日本語学習者を対象にー

研究課題名（英文）A Study on Misuse of Japanese Passive Expressions: Focusing on Native Chinese-Speakers Learning Japanese

研究代表者

任 霞 (REN, XIA)

関西学院大学・言語コミュニケーション文化研究科・大学院奨励研究員

研究者番号：70963825

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目標は日本語学習者による受身文の誤用の傾向及び誤用が生起するメカニズムを解明することである。大規模な学習者作文コーパスから受身文の誤用を抽出し、他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞という動詞分類法を踏まえ、学習者の受身文の誤用を分類し、誤用の全体像と傾向を明らかにした。その上で、統語的制約、意味的制約と話者の事態の捉え方から誤用の要因を探り、中国語の受身表現との異同を考慮に入れ、誤用のメカニズムを解明した。さらに誤用のメカニズムに基づき、日本語教育現場における受身文の指導法の提言を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では豊富な誤用データを利用し、他動詞、非能格動詞、非対格動詞という統語的動詞分類法に基づく誤用の傾向とメカニズムについて考察した上で、中国語の受身文との相違を考慮に入れた誤用のメカニズムを探った。このような分析のほうが、個別例を対象に行われた研究や動詞の何十種類もある具体的な意味による誤用の分類より、学習者にとって分かりやすく一般化しやすい説明になる。また、母語干渉の可能性が高い誤用とそうではない誤用を明確にさせたこと、日中両言語の受身の非対応現象が生じるメカニズムを解明したことで、日本語教育現場にも中国語教育現場にも実用性が高い研究成果になると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the tendency and mechanism behind learners' incorrect use of Japanese passive expressions observed in the "YUK Writing Corpus". First, the study classified learners' misuse by transitive verb, unergative verb, and unaccusative verbs, which led to identification of a general tendency of misuse. Next, a comparative analysis of the Japanese passive with Chinese passive. And the study compared the syntactic and semantic differences of Chinese and Japanese passive, and analyzed the differences of the construal between Japanese and Chinese. Finally, based on tendency and mechanisms of the misuse, the thesis suggests teaching methods for Japanese passive in Japanese language education.

研究分野：日本語教育、日本語学、中国語学

キーワード：受身文 他動詞 非対格動詞 非能格動詞 日本語学習者 誤用 中国語

1. 研究開始当初の背景

(1) 日中両言語において受身文の非対応現象はよく見られ、中国語では受身文が使用される場合に日本語では受身文にならない場合は少なくない。また、中国語では受身文が使用されない事態は、日本語では受身文を使用しなければならないこともよくある。このような非対応が原因の一つと考えられ、中国語母語話者日本語学習者にとって、受身文がなかなか習得しにくい文法項目となり、誤用がよく見られる。例えば『YUK 作文コーパス』に受身文の誤用が 2,696 例観察される。

(2) 学習者の受身表現の誤用については、多くの研究がなされてきたものの、限られた数の誤用例を対象に行われたものがほとんどであり、誤用の傾向を解明することが難しい。学習者コーパスを対象とした研究は「作成/創作動詞」「思考動詞」といった動詞の具体的な意味に基づいて誤用を分類している。しかし、動詞の意味については何十種類もありながら学界で統一されておらず、いずれも一般化に至っていないという現状がある。そのため、教育現場において実用的な説明になっているとは考えられない。また誤用の要因については、従来の研究では日中両言語の受身表現に非対応現象が観察され、学習者の誤用は母語干渉に起因すると指摘されている。しかし非対応現象の指摘にとどまり、加えて誤用のすべてが母語干渉に起因するわけではないため、日中両言語の受身の非対応現象が生起するメカニズム、母語干渉の可能性が高い誤用とそうでない誤用を明確にさせる必要があると考えられる。

(3) 「(ら)れる」形式の受身表現と、「～を受ける」「である」という迂言的受身表現との選択における誤用については、先行研究ではまだ言及されていない。なぜ学習者の産出した文が誤用と見なされたのか、それぞれの使用条件にどのような相違があるのか、これらについて解明されなければ、学習者の習得には繋がらないと思われる。

2. 研究の目的

以上を踏まえ本研究では『YUK 作文コーパス』から抽出した 2,645 例 (2,696 例のうち、51 例の語尾変化の誤りなどを除いた) の受身文の誤用を対象に、以下の 4 点を目的として考察を行う。

(1) 受身文の誤用メカニズムの一般化しやすい説明を目指し、他動詞、非能格動詞、非対格動詞という動詞分類法を踏まえて、中国語母語話者日本語学習者による受身文の誤用のパターンと傾向を明らかにする。

(2) 誤用に関わる各構文の統語的制約を再整理したうえで、統語的には成立するにもかかわらず誤用と見なされている用例について、発話場や文脈に課せられる意味的制約と話者の事態の捉え方を解明する。

(3) 上記の (1)(2) を踏まえ、中国語の受身表現との相違を考慮に入れた誤用のメカニズムを究明する。

(4) 誤用メカニズムに基づき、日本語教育現場における受身文の指導法の提言を試みる。

3. 研究の方法

山梨 (2001 : 8) では「認知言語学のアプローチでは語彙レベル、句レベル、構文レベルなどのどのレベルの言語単位も、認知主体の概念化の認知プロセスを反映する意味に対応づけられる」と指摘されている。つまり、話者 (認知主体) の事態の捉え方が語彙及び構文の選択に影響を及ぼすことになる。この点を踏まえると、異なる種類の動詞の選択、受身表現と能動表現という構文の選択にも話者の捉え方が反映されると考えられる。従って、本研究では受身文の誤用に関わる各構文の統語的制約と意味的制約に加え、話者の事態の捉え方についても考察した。

また、日本語と中国語の言語間においては、中右 (1998 : 116) に指摘されているように、「客観的には同一のものや事態が記述の対象であっても、言語が異なれば、その事物に対する可能な捉え方の内のどれが言語表現の意味の一部として慣習化されているかが異なりうる。また、2 つの言語の対応する文法カテゴリーが、基本的な経験に根差したプロトタイプ的な意味を共有しつつも、その拡張の方向や程度が異なるために、全体としてはかなり対照的な性格を示すこともあり得る」。そこで、本研究では、日本語の受身表現の統語的制約と意味的制約を分析したうえで、中国語の受身文との対照研究を通して、日中両言語において話者の事態の捉え方がどのように異なり、どのような対照的な性格が形成されているかについて考察した。これにより、学習者の産出した誤用がどのようなメカニズムで生じたか、日中両言語の受身の対応・非対応の現象が学習者の習得にどのように影響を及ぼすか、特に非対応現象が学習者の誤用とどの程度関連するかということを明らかにした。

4. 研究成果

本研究では、次のことを明らかにした。

(1) 学習者の受身の誤用は、不使用と過剰使用に大きく分けることができ、図1と図2のような誤用パターンがある。他動詞の能動と受身、他動詞受身と非対格動詞、非対格動詞と非対格動詞受身、非能格と非能格動詞受身の誤用がもっとも顕著である。

(2) 日中両言語の受身の対応・非対応からみると、図3のように、日本語の受身の不使用が生じた場合、日本語では「(ら)れる」受身の使用が必要であるが中国語では「被」構文は使用されないというような非対応が多い。このような非対応は、不使用の全体の82.3%を占めている。特に無情主語受身の不使用が非対応の88.8%を占めており、圧倒的に多い。これは従来の研究で指摘されている日中両言語における視点の制約の差異の他、主に日本語の「(ら)れる」形式の受身が中国語の「被」構文と発想的に異なること、日本語の自他動詞は中国語の「不及物動詞/及物動詞」と一致しないことがよくあり、日本語と中国語の事態の捉え方が異なることに起因する。一方、過剰使用が生じた場合、日本語でも中国語でも受身が使用されないという対応の場合が多い。つまり、母語干渉の可能性が低い場合に過剰使用が多発するわけである。他方、受身の使用の非対応関係にある過剰使用は13.9%しか占めていない。何らかの原因による心的動きや不本意的な経験、何らかの原因による対象の変化を述べる際の誤用が多く見られる。

(3) 学習者の「である」と「(ら)れている」の誤用が従来の研究ではまだ説明できない。誤用を手掛かりに両者の使用条件及び学習者の誤用メカニズムについて考察を行った。その結果、「である」と「(ら)れている」の選択には話者の異なる事態の捉え方によって決まることが明らかになった。学習者が「である」の使用条件を理解できておらず、中国語の「V+有」を「である」に対応して表現したことにより誤用が生じている可能性があると考えられる。

(4) 誤用の傾向とメカニズムに基づき、日本語教育において、日本語のナル型傾向を示す構文パターン、有対他動詞と無対他動詞の意味特徴、日本語の他動詞、非能格動詞、非対格動詞のそれぞれの意味範疇、各種類の動詞と受身文との関係、日本語の他動詞と中国語の「及物動詞」の不一致、行為者を視野に入れるか否かに影響を及ぼす要素、視点の制約に関する日本語と中国語の相違という5点を学習者に理解させる必要があると考えられる。

上記の研究成果は、以下のとおりに公開されている。

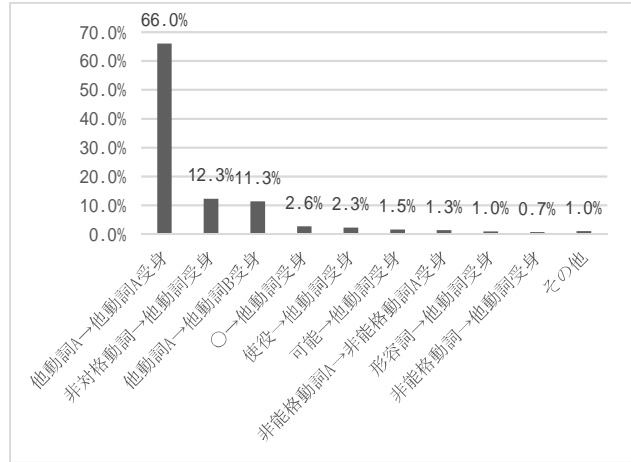


図1 受身の不使用の下位パターンの分布 (n=1,362)

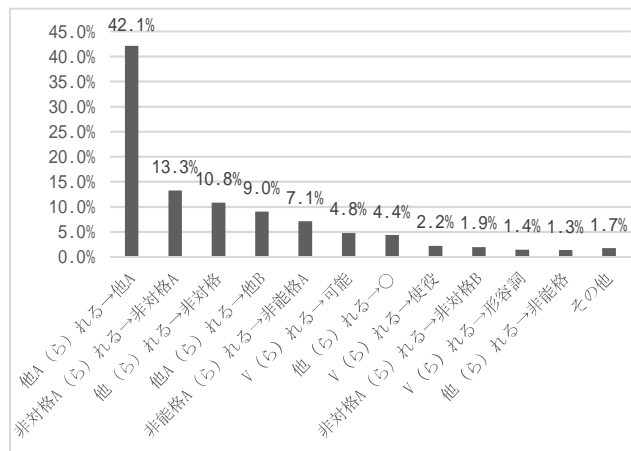


図2 受身の過剰使用の下位パターンの分布 (n=1,283)

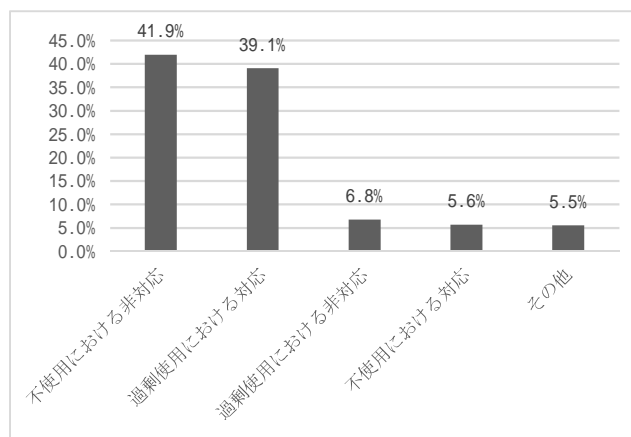


図3 過剰使用と不使用における日中両言語の受身の対応・非対応 (n=2,645)

任霞(2022)「存在構文における『てある』と『(ら)れている』の誤用に関する一考察」『2022年度日本語教育と日本学研究国際シンポジウム』中国教育部外国語教学指導委員会日本語分委員会・中国日本語教学研究会上海分会、同濟大学(中国、オンライン)

任霞(2023)「思考動詞の自発的受身の使用条件に関する一考察 学習者の誤用を手掛かりに」日本語学会2023年度春季大会、青山学院大学

任霞(2023)「無情物主語受身文の誤用メカニズムの解明及び指導法の提案 学習者作文コーパスの誤用データに基づいて」2023年度日本語教育学会春季大会(オンライン)

任霞(2023)「日本語受身表現の誤用研究 中国語母語話者日本語学習者を対象に」関西学院大学博士学位論文

任霞(2023)《日语被动句的偏误研究》浙江工商大学出版社.

<引用文献>

中右実、西村義樹『構文と事象構造』研究社出版、1998

山梨正明編『認知言語学論考』ひつじ書房、2001

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 任霞
2. 発表標題 存在構文における「である」と「（ら）れている」の誤用に関する一考察
3. 学会等名 中国教育部外国語教学指導委員会日本語分委員会・中国日本語教学研究会上海分会（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 任霞	4. 発行年 2023年
2. 出版社 浙江工商大学出版社	5. 総ページ数 239
3. 書名 日語被動句的偏誤研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------